

久保田-Leopoldt による p 進 L 関数の構成

静岡県立三島北高等学校 宮川 幸隆

2003. 7. 23.

目 次

1 Dirichlet の L 関数	2
2 一般 Bernoulli 数と L 関数の非正整数値での値	2
2.0.1	
$L(1-n, \chi) = -\frac{B_{\chi, n}}{n} \quad (n \geq 1)$	5
2.0.2	
$\sum_{r=1}^{fN} \chi(r) r^n = \frac{(B_\chi + fN)^{n+1} - B_\chi^{n+1}}{n+1} \quad (n \geq 0)$	5
2.0.3	
$B_{\chi, n} = \lim_{\rho \rightarrow \infty} \frac{1}{fp^\rho} \sum_{r=1}^{fp^\rho} \chi(r) r^n$	5
2.0.4	
$L(1-n; \chi) = -\frac{1}{n} \lim_{\rho \rightarrow \infty} \frac{1}{fp^\rho} \sum_{r=1}^{fp^\rho} \chi(r) r^n \quad (n \geq 1)$	6
3 p 進指數関数と p 進対数関数	6
4 p 進 L 関数の構成	7
4.0.5	
$(1 - (\chi\omega^{-n})(p)p^n)L(1-n, \chi\omega^{-n}) = -\frac{1}{n} \lim_{\rho \rightarrow \infty} \frac{1}{fp^\rho} \sum_{1 \leq k < fp^\rho, (k, p)=1} \chi(k) \langle k \rangle^n$	7
4.0.6	
$L_p(s, \chi) = -\frac{1}{1-s} \lim_{\rho \rightarrow \infty} \frac{1}{fp^\rho} \sum_{1 \leq k < fp^\rho, (k, p)=1} \chi(k) \langle k \rangle^{1-s}$	8
5 参考文献	8

1 Dirichlet の L 関数

n を正整数とする。有理整数環 Z から複素数体 C への写像

$$\chi : Z \rightarrow C$$

は、

- i) $a \equiv b \pmod{n} \implies \chi(a) = \chi(b)$,
- ii) $\chi(ab) = \chi(a)\chi(b) \quad \text{for } \forall a, b \in Z$,
- iii) $\chi(a) \neq 0 \iff (a, n) = 1$

を満たすとき、 $\text{mod } n$ で定義された Dirichlet 指標と呼ばれる。

m を n の正の約数とし、 χ' を $\text{mod } m$ で定義された Dirichlet 指標とするとき、 $\chi(a), \quad a \in Z$, を

$$\chi(a) = \begin{cases} \chi'(a) & ((a, n) = 1 \text{ のとき}), \\ 0 & ((a, n) > 1 \text{ のとき}) \end{cases}$$

によって定義すると、 χ は $\text{mod } n$ で定義された Dirichlet 指標となる。指標 χ を χ' から誘導された指標と呼ぶ。 $\text{mod } n$ で定義された Dirichlet 指標が、 $m < n$ なる n のどんな正の約数 m に対しても、 $\text{mod } m$ で定義された Dirichlet 指標から誘導されないとき、 χ は原始的であると呼ばれる。このとき n は χ の導手と呼ばれる。以下においては、すべての Dirichlet 指標は原始的であると仮定する。 χ を Dirichlet 指標とし、

$$L(s, \chi) = \sum_{n=1}^{\infty} \chi(n) n^{-s}$$

とおくと $L(s, \chi)$ は半平面 $\Re(s) > 1$ において s の正則関数を表すが、これは全 s 平面上に解析接続され、 χ に関する Dirichlet の L 関数と呼ばれる。

単位指標 $\chi^0 : Z \ni a \mapsto 1 \in C$ に関する Dirichlet の L 関数は、Riemann の ζ 関数 $\zeta(s) = \sum_{n=1}^{\infty} n^{-s}$ に他ならない。 $\chi \neq \chi^0$ ならば $L(s, \chi)$ は全 s 平面上において s の正則関数を表すが、 $L(s, \chi^0) = \zeta(s)$ は $s = 1$ において、位数 1、留数 1 の唯一の極を持つ。

2 一般 Bernoulli 数と L 関数の非正整数値での値

導手 f の Dirichlet 指標 χ に対し、Bernoulli 数の拡張である一般 Bernoulli 数（正確には、 χ に属する一般 Bernoulli 数） $B_{\chi, n}$ が次のように定義される： n 番目の一般 Bernoulli 数 ($n = 0, 1, 2, \dots$) は、 t を変数として母関数

$$\sum_{a=1}^f \frac{\chi(a)te^{at}}{e^{ft} - 1} = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{n!} B_{\chi, n} t^n$$

で定義される。右辺の級数を記号的に $e^{B_{\chi} t}$ で表す。

$$e^{B_{\chi} t} = \sum_{n=0}^{\infty} \frac{1}{n!} B_{\chi, n} t^n$$

であるから、 $B_{\chi, n}$ と B_{χ}^n を同一視する訳である。

χ が単位指標 χ^0 の場合には、その導手は 1 に等しく、 $B_{\chi, n}$ は普通の Bernoulli 数 B_n に他ならない。

一般 Bernoulli 数 $B_{\chi, n}$ は、有理数体 Q 上で、 χ の全ての値 $\chi(a), a \in Z$ の添加で生じる円分体 $Q(\chi) = Q(\{\chi(a); a \in Z\})$ に属する数である。

さて、 $\epsilon > 0$ を十分小として、 $C_{\epsilon} = (-\infty, -\epsilon] \cup K_{\epsilon} \cup [-\epsilon, \infty)$ 、 K_{ϵ} は原点 O を中心とする半径 ϵ の円周から点 $-\epsilon$ を除いたものとする。

複素変数 s は、任意として、 C_ϵ 上での積分

$$F_X(s) = \int_{C_\epsilon} e^{Bx t} t^{s-1} \frac{dt}{t} = \int_{C_\epsilon} \sum_{a=1}^f \frac{\chi(a)e^{at}}{e^{fu}-1} t^{s-1} dt$$

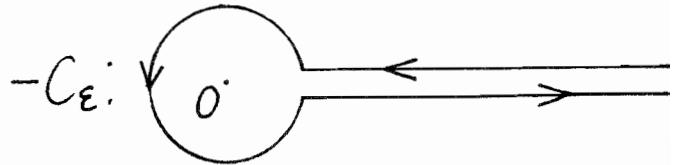
を考える。ここで、 $t^{s-1} = e^{(s-1)\log t}$ は主値を表す。 $t = -u$ と置換すれば、 $dt = -du$ で、

$$\begin{aligned} F_X(s) &= \int_{-C_\epsilon} \sum_{a=1}^f \frac{\chi(a)e^{-au}}{e^{-fu}-1} (-u)^{s-1} (-du) \\ &= \int_{-C_\epsilon} \sum_{a=1}^f \frac{\chi(a)e^{(f-a)u}}{e^{fu}-1} (-1)^{s-1} u^{s-1} du \\ &= (-1)^{s-1} \int_{-C_\epsilon} \sum_{a=1}^f \frac{\chi(a)e^{(f-a)u}}{e^{fu}-1} u^{s-1} du \\ &= (-1)^{-1} (-1)^s \int_{-C_\epsilon} \sum_{a=1}^f \frac{\chi(a)e^{(f-a)u}}{e^{fu}-1} u^{s-1} du \\ &= -e^{-\pi i s} \int_{-C_\epsilon} \sum_{a=1}^f \frac{\chi(a)e^{(f-a)u}}{e^{fu}-1} u^{s-1} du \\ &= -e^{-\pi i s} \int_{-C_\epsilon} \sum_{a=1}^f \frac{\chi(a)e^{au}}{e^{fu}-1} u^{s-1} du \\ &= -e^{-\pi i s} \int_{-C_\epsilon} \sum_{a=1}^f \frac{\chi(a)e^{(a-f)u}}{1-e^{-fu}} u^{s-1} du \\ &= -e^{-\pi i s} \int_{-C_\epsilon} \sum_{a=1}^f \frac{\chi(a)e^{-au}}{1-e^{-fu}} u^{s-1} du, \end{aligned}$$

ここで、 $u^{s-1} = e^{(s-1)\log u}$ は

$0 \leq \Im(\log u) \leq 2\pi$ をもつ。

明らかに、



$$\int_{-C_\epsilon} \sum_{a=1}^f \frac{\chi(a)e^{-au}}{1-e^{-fu}} u^{s-1} du$$

$$\begin{aligned} &= \int_{\infty}^{\epsilon} \sum_{a=1}^f \frac{\chi(a)e^{-au}}{1-e^{-fu}} e^{(s-1)\log u} du + \int_{-K_\epsilon}^f \sum_{a=1}^f \frac{\chi(a)e^{-au}}{1-e^{-fu}} u^{s-1} du + \int_{\epsilon}^{\infty} \sum_{a=1}^f \frac{\chi(a)e^{-au}}{1-e^{-fu}} e^{(s-1)(\log u + 2\pi i)} du \\ &= \int_{-K_\epsilon}^f \sum_{a=1}^f \frac{\chi(a)e^{-au}}{1-e^{-fu}} u^{s-1} du + (e^{2\pi i s} - 1) \int_{\epsilon}^{\infty} \sum_{a=1}^f \frac{\chi(a)e^{-au}}{1-e^{-fu}} e^{(s-1)(\log u + 2\pi i)} du. \end{aligned}$$

更に明らかに、

$$\lim_{\epsilon \rightarrow 0} \int_{-K_\epsilon}^f \sum_{a=1}^f \frac{\chi(a)e^{-au}}{1-e^{-fu}} u^{s-1} du = 0$$

なので、

$$\lim_{\epsilon \rightarrow 0} F_\chi(s) = -(e^{\pi i s} - e^{-\pi i s}) \int_0^\infty \sum_{a=1}^f \frac{\chi(a)e^{-au}}{1-e^{-fu}} u^{s-1} du.$$

一方では、

$$\begin{aligned} \int_0^\infty \sum_{a=1}^f \frac{\chi(a)e^{-au}}{1-e^{-fu}} u^{s-1} du &= \int_0^\infty \sum_{n=0}^\infty e^{-nfu} \sum_{a=1}^f \chi(a)e^{-au} u^{s-1} du \\ &= \int_0^\infty \sum_{n=0}^\infty \sum_{a=1}^f \chi(a)e^{-(a+nf)u} u^{s-1} du \end{aligned}$$

ここで、 $\chi(a) = \chi(a + nf)$ に注意すると、

$$= \int_0^\infty \sum_{n=1}^\infty \chi(n)e^{-nu} u^{s-1} du = \sum_{n=1}^\infty \chi(n) \int_0^\infty e^{-nt} t^{s-1} dt$$

ここで、 $nt = u$ と置換すると、 $du = ndt$ であって、

$$= \sum_{n=1}^\infty \chi(n) \int_0^\infty e^{-u} \left(\frac{u}{n}\right)^{s-1} \frac{du}{n} = \sum_{n=1}^\infty \frac{\chi(n)}{n^s} \Gamma(s) = L(s, \chi) \Gamma(s)$$

ただし、

$$\Gamma(s) = \int_0^\infty e^{-u} u^{s-1} du$$

はガンマ関数を表す。したがって

$$\lim_{\epsilon \rightarrow 0} F_\chi(s) = \lim_{\epsilon \rightarrow 0} \int_{C_\epsilon} e^{B_\chi t} t^{s-1} \frac{dt}{t} = -2i \sin(\pi s) L(s, \chi) \Gamma(s).$$

ゆえに、

$$\Gamma(s) \Gamma(1-s) = \frac{\pi}{\sin(\pi s)}$$

を用いて、

$$\frac{L(s, \chi)}{\Gamma(1-s)} = -\frac{1}{2\pi i} \int_C e^{B_\chi t} t^{s-1} \frac{dt}{t}$$

を得る。ここに C は C_ϵ の極限 ($\epsilon \rightarrow 0$ のときの) である。ここで、 $s = 1-n$ とおけば、留数定理から、

$$\frac{L(1-n, \chi)}{(n-1)!} = -\frac{1}{2\pi i} \int_C e^{B_\chi t} t^{-n} \frac{dt}{t} = -\frac{1}{2\pi i} \int_C \sum_{k=0}^\infty \frac{B_{\chi, k}}{k!} t^{k-n-1} dt = -\frac{B_{\chi, n}}{n!},$$

したがって、

2.0.1

$$L(1-n, \chi) = -\frac{B_{\chi, n}}{n} \quad (n \geq 1)$$

が成り立つ。

次に、定義式

$$\sum_{a=1}^f \frac{\chi(a)te^{at}}{e^{ft}-1} = e^{B_x t}$$

の両辺に e^{xt} を掛け、分母を払って t^{n+1} の係数を比較すると、

$$\sum_{a=1}^f \chi(a)te^{at}e^{xt} = e^{B_x t}e^{xt}(e^{ft}-1),$$

$$\sum_{a=1}^f \chi(a)te^{(a+x)t} = e^{(B_x+x+f)t} - e^{(B_x+x)t}$$

から、

$$\sum_{a=1}^f \chi(a) \frac{(a+x)^n}{n!} = \frac{(B_x+x+f)^{n+1} - (B_x+x)^{n+1}}{(n+1)!},$$

即ち、

$$\sum_{a=1}^f \chi(a)(a+x)^n = \frac{(B_x+x+f)^{n+1} - (B_x+x)^{n+1}}{n+1}$$

を得る。ここで $x = 0, f, \dots, f(N-1)$ として和を作れば、

2.0.2

$$\sum_{r=1}^{fN} \chi(r)r^n = \frac{(B_x+fN)^{n+1} - B_x^{n+1}}{n+1} \quad (n \geq 0)$$

を得る。ここで、 B_x^n は記号的に $B_{\chi, n}$ を表す訳である。

素数 p を定め、 $N = p^\rho$ にとり、 $\rho \rightarrow \infty$ とすると、

2.0.3

$$B_{\chi, n} = \lim_{\rho \rightarrow \infty} \frac{1}{fp^\rho} \sum_{r=1}^{fp^\rho} \chi(r)r^n$$

を得ることが示される。実際、2.0.2 から、

$$fNB_x^n + \frac{1}{n+1} \left\{ \binom{n+1}{2} (fN)^2 B_x^{n-1} + \binom{n+1}{3} (fN)^3 B_x^{n-2} + \cdots + (fN)^{n+1} \right\} = \sum_{r=1}^{fN} \chi(r)r^n,$$

なので、

$$fp^\rho B_{\chi, n} + \frac{1}{n+1} \left\{ \binom{n+1}{2} (fp^\rho)^2 B_{\chi, n-1} + \binom{n+1}{3} (fp^\rho)^3 B_{\chi, n-2} + \cdots + (fp^\rho)^{n+1} \right\} = \sum_{r=1}^{fp^\rho} \chi(r)r^n,$$

即ち、

$$B_{\chi,n} = \frac{1}{fp^\rho} \sum_{r=1}^{fp^\rho} \chi(r) r^n - \frac{1}{n+1} \left\{ \binom{n+1}{2} fp^\rho B_{\chi,n-1} + \binom{n+1}{3} (fp^\rho)^2 B_{\chi,n-2} + \cdots + (fp^\rho)^n \right\}$$

であって、 p 進数体 \mathbf{Q}_p 上の円分体 $\mathbf{Q}_p(\chi)$ において、 $\rho \rightarrow \infty$ のとき $\{ \quad \} \rightarrow 0$ となるからである。

2.0.1 と 2.0.3 から、 p 進極限公式

2.0.4

$$L(1-n, \chi) = -\frac{1}{n} \lim_{\rho \rightarrow \infty} \frac{1}{fp^\rho} \sum_{r=1}^{fp^\rho} \chi(r) r^n \quad (n \geq 1)$$

を得る。

3 p 進指数関数と p 進対数関数

p を素数とする。有理数 a に対し a の p 進付値 $ord_p(a)$ が次のように定義される： まず、 $ord_p(0) = \infty$ と定める。次に $a \neq 0$ の場合

$$a = p^m \frac{u}{v} \quad (m \in \mathbb{Z}; \quad u, v \text{ は } p \text{ で割れない整数})$$

と表すとき、 $ord_p(a) = m$ と定める。そこで、

$$|a|_p = p^{-ord_p(a)}$$

とおき、これを a の p 進絶対値と呼ぶ。 $|0|_p = p^{-ord_p(0)} = p^{-\infty} = 0$ と考える。解析を行う場合、実数体 \mathbb{R} で考えるより複素数体 \mathbb{C} で考えた方が良いが、 p 進数体 \mathbf{Q}_p の場合に \mathbb{C} に相当するのは、 \mathbf{Q}_p の代数的閉包の完備化 C_p である。 $|\quad|_p$ は C_p に延長され、

(1) $|a|_p \geq 0$ かつ等号は $a = 0$ のときにのみ成り立つ。

(2) $|ab|_p = |a|_p |b|_p$

(3) $|a+b|_p \leq \max(|a|_p, |b|_p)$

という性質を持つ。また、次が成り立つ：

$$\mathbb{Z}_p = \{a \in \mathbf{Q}_p; |a|_p \leq 1\},$$

$$\mathbb{Z}_p^* = \{a \in \mathbf{Q}_p; |a|_p = 1\}.$$

級数

$$\sum_{n=0}^{\infty} \frac{z^n}{n!}$$

は C_p の部分集合

$$|z|_p < |p^{1/(p-1)}|_p$$

で収束する。そこで、この級数で定義される関数を $\exp_p(z)$ で表し、 p 進指数関数と呼ぶ。 p 進指数関数も $|x|_p, |y|_p < |p^{1/(p-1)}|_p$ で、

$$\exp_p(x+y) = \exp_p(x) \exp_p(y)$$

を満たす。

同様にして、 p 進対数関数を

$$\log_p(z) = \sum_{n=1}^{\infty} \frac{(-1)^{n-1}(z-1)^n}{n}$$

で定義すると、 $|z-1|_p < 1$ のとき収束する。更に

$$\log_p(xy) = \log_p(x) + \log_p(y), \quad \exp_p(\log_p(z)) = z, \quad \log_p(\exp_p(z)) = z$$

が両辺が意味を持つ範囲で成り立つ。

更に、 $p \neq 2$ ならば $m \geq 1$ とし、 $p \neq 2$ ならば $m \geq 2$ とするとき、 \exp_p と \log_p は群としての互いに逆な同型

$$\text{加法群 } p^m Z_p \cong \text{乗法群 } 1 + p^m Z_p = \{1 + p^m a; a \in Z_p\}$$

を与える。

4 p 進 L 関数の構成

素数 p が $p \neq 2$ ならば $q = p$ 、 $p = 2$ ならば $q = 4$ とおく。これは $|q|_p < |p^{1/(p-1)}|_p$ となる最小の p の巾で、よって p 進指数関数 $\exp_p(z)$ は $|z|_p \leq |q|_p$ のとき収束する。また Z_p^* についての次の事実は基本的である：

$$Z_p^* = (Z/q)^* \times (1 + qZ_p).$$

射影 $\omega : Z_p^* \longrightarrow (Z/q)^*$ を Teichmüller 指標と呼ぶ。

$\langle a \rangle = \omega(a)^{-1}a$ とおくと、 $\langle \quad \rangle : Z_p^* \longrightarrow 1 + qZ_p$ という写像ができる。 $a \in Z_p^*$ のとき、 $\langle a \rangle \in 1 + qZ_p$ であるから、 $\log_p \langle a \rangle \in qZ_p$ 、よって、 $|\log_p \langle a \rangle|_p \leq |q|_p$ 。従って、

$$\langle a \rangle^s = \exp_p(s \log_p \langle a \rangle)$$

という s の関数は、 $|s|_p < |q^{-1}p^{1/(p-1)}|_p$ で定義され、特に $s \in Z$ でも定義される。

p 進極限公式 2.0.4 に於いて、 $r = kp^l$ ($(k, p) = 1; l = 0, 1, 2, \dots$) の形のものを等比級数の公式を用いてまとめると、 $n \geq 1$ のとき、

$$\begin{aligned} -nL(1-n, \chi) &= \lim_{\rho \rightarrow \infty} \frac{1}{fp^\rho} \sum_{r=1}^{fp^\rho} \chi(r)r^n = \lim_{\rho \rightarrow \infty} \frac{1}{fp^\rho} \sum_{1 \leq k < fp^\rho, (k, p)=1} \sum_{l=0}^{\infty} \chi(kp^l)(kp^l)^n \\ &= \lim_{\rho \rightarrow \infty} \frac{1}{fp^\rho} \sum_{1 \leq k < fp^\rho, (k, p)=1} \chi(k)k^n \sum_{l=0}^{\infty} \{\chi(p)p^n\}^l = \frac{1}{1 - \chi(p)p^n} \lim_{\rho \rightarrow \infty} \frac{1}{fp^\rho} \sum_{1 \leq k < fp^\rho, (k, p)=1} \chi(k)k^n \end{aligned}$$

と書ける。 ω は導手が q の Dirichlet 指標であるから、 χ を $\chi\omega^{-n}$ で置き換え、両辺に $1 - (\chi\omega^{-n})(p)p^n$ を掛けると、

4.0.5

$$(1 - (\chi\omega^{-n})(p)p^n)L(1-n, \chi\omega^{-n}) = -\frac{1}{n} \lim_{\rho \rightarrow \infty} \frac{1}{fp^\rho} \sum_{1 \leq k < fp^\rho, (k, p)=1} \chi(k)\langle k \rangle^n$$

を得る。そこで、 $f > 1$ のとき、

4.0.6

$$L_p(s, \chi) = -\frac{1}{1-s} \lim_{\rho \rightarrow \infty} \frac{1}{fp^\rho} \sum_{1 \leq k < fp^\rho, (k,p)=1} \chi(k) \langle k \rangle^{1-s}$$

と置くと、この式の右辺の極限は $|s|_p < |q^{-1}p^{1/(p-1)}|_p$ という範囲で収束し、 s の収束巾級数に展開される。この s の関数 $L_p(s, \chi)$ を Dirichlet 指標 χ に対する p 進 L 関数と呼ぶ。

$n = 1, 2, 3, \dots$ に対しては、4.0.5 と 4.0.6 から、

$$L_p(1-n, \chi) = -\frac{1}{n} \lim_{\rho \rightarrow \infty} \frac{1}{fp^\rho} \sum_{1 \leq k < fp^\rho, (k,p)=1} \chi(k) \langle k \rangle^n = (1 - (\chi\omega^{-n})(p)p^n)L(1-n, \chi\omega^{-n})$$

が成り立つ訳である。これが p 進 L 関数の主定理である。

5 参考文献

- [1] K. Iwasawa, Lectures on p-adic L-functions, Princeton U. P., 1972.
- [2] 白谷 克巳、整数論入門、牧野書店、2001.
- [3] 加藤 和也・黒川 信重・斎藤 豪、数論 1、岩波書店、1996.
- [4] 森田 康夫、 p 進 L -関数とは?、雑誌「数学のたのしみ」、第 15 号、日本評論社、1999.